

## 『ベルゼバブ』解題

(グルジェフ『ベルゼバブが孫に語った物語』訳者あとがき)

惑星地球の科学用語では「ビッグバン」をもって始まったとされる「一から多げ」の創造の流れは、ベルゼバブが指摘するまでもなく、自己消耗性のプロセスであるから、それがいかにしてその行き着く果てで方向を変え、「多から一」への流れに転じるかは、意識的にせよ非意識的にせよ、あらゆる生き物にとっての最大の関心事である。

これは宗教と科学における探究の本質的な課題であるにとどまらない。個々の人間にとってこれは、いかに人生なるものが基本的には下り坂の消耗性のプロセスに終わることなく、みずからの内外に上昇性のプロセスを生み出すことでそれ自体の目的をかなえられるかという、無視しがたい問いかけに相当する。

科学においては、十九世紀後半、グルジェフの生誕にやや先立って、科学は「熱力学第二法則」の定式化により、この「一から多へ」の方向に向かうトップダウンの流れに沿うかたちで、全体を形作るさまざまな規模の「系」(宇宙)の内部では、時間とともにエントロピーすなわち系の疲弊度が不可逆的に増大していくことは結局のところ避けられない、局所的にこの傾向に逆らうことは外部または全体の犠牲をもってのみ可能であり、最終的および全体的にはこの傾向に逆らうことはできないという結論に達した。「非情なるエエロパス」、「時間の作用」とは、このことである。

どうして全体的な傾向としてのエントロピーの増大は避けられないのか？ ダイナミックな動きに向けてのポテンシャルは、肯定と否定、プラスとマイナス、あるいは上下や高低といった、二元的な対立や対比のなかに宿されているが、宇宙で不可逆的に進行する混ざり合いや均一化、あるいは資源の消費により、このポテンシャルは時間とともに失われていく傾向にあるからである。

地球規模での資源の枯渇と環境の疲弊、世界中が「つながって」しまうことによる多様性の喪失、時間とともに起きざるをえない男女の間での関係の陳腐化、年をとるにつれ

深まっていく人生への幻滅など、これはありとあらゆる規模の世界を総じて支配する傾向として肌身をもって感じる事ができるものである。

われわれは自分の内外で起きているプロセスのなかに見られるこうした傾向に思いを向けるとき、「時間の作用」を実感する。「時間の相対的理解」の章でベルゼバブはこの観点から、時間とはありとあらゆるプロセスと混じり合う目に見えないものであると論じる。すなわちそれは、ありとあらゆるプロセスのなか目に見ることができるこの法則のあらわれである。

このように見るとき、時間の流れとは、熱力学の第二法則に沿って宇宙全体に生じる一方通行の流れと不可分のものである。この流れを遡り、エントロピーの低くなる方向に時間を巻き戻したなら、その原点で見出される一者は、創造に向けてのポテンシャルとして二元的な対立を最大限にはらんだ一者のはずである。最大限の対立をはらみながら一者である。したがって、そこには、対立する二つの力のほか、それを折り合わせてひとつとする第三の力の働きがあるはずだ。「三位一体」もしくは「トリアマジカムノ」の原理はこうして理解されうる。

熱力学の第二法則に沿った下降性のプロセスが物質世界をほぼ支配していることは否定しがたく、しかも論理的には、この下降性の流れのなかから、これに対抗する回帰性の進化の流れ、「多から一へ」の動きが意外にも立ちあらわれる道理はないのだが、それでもわれわれは、この論理的にはその始まりを特定しにくい下から上、あるいは多から一へと向かう回帰の流れが、いわば宇宙の伏流として存在することのあらわれを見ている。

そもそも、この回帰性の流れがなかったなら、われわれは生まれて来ることさえできなかった。もしも拡散の動きが回帰の動きに転じる仕組みがなかったなら、原初の力は四方八方に拡散するだけで、それが宇宙に構造をもたらし、生命を生み出すこともなかったはずである。また、たとえわれわれの人生がおおむね熱力学の第二法則に従属した下り坂の流れであるとしても、その最初の時点でわれわれが帯びていた高いポテンシャルは

いったいどこから到来したのか？

これをめぐる宇宙の秘密、「世界の創造と維持の法則」の解明が、「全体とすべて」と第されたシリーズの第一集である本書の最大のテーマである。本書が書かれた時点において、そしてその後も比較的最近に至るまで、本書の内容は非常に目新しく、独自で難解、あるいは「秘教的」なものとなされてきた。ウスペンスキー、オラージュといった、宣教師的な志向をもってグルジェフに接近し、やがてそのもとを離れた後も「第四の道」の主要な教師とみなされてきた人たちも、本書の内容をまるで理解していないと言っても過言ではない<sup>1</sup>。

だが、いまの時点でこれを振り返ると、本書の途方もない予見性を例証するかたちで、ベルゼバブがあまり高く評価していなかった惑星地球の科学も、その後の数十年を経て、ベルゼバブの理解を追いかけるかたちで発展してきた。この発展を牽引したのは、グルジェフがその人生のなかで訪れた最西端の地であるニューメキシコ州のサンタフェ研究所が主導した複雑系科学の研究<sup>2</sup>、すなわち従来の論理では捉えきれない複雑な相互関係の支配する系のなかで「多から一」への流れが意外にも立ちあらわれることの秘密を扱った研究である。

「一と多」あるいは「全体とすべて」の間でのダイナミズム、ベルゼバブの言葉で言うなら「ヘプタパラパルシノク」の法則に従ったものであるプロセスの展開における非線形性もしくは不連続性、そこにおいて観察される複数のプロセスもしくはオクターブの間での依存関係、そこから意外にも立ちあらわれる有機的な造形のパターン、「多から一へ」の動きの発端としての自己組織化に向けての傾向、そんな集合的な動きのなかで単一の

---

<sup>1</sup> そのため「フォースウェイ」、「グルジェフ＝ウスペンスキー思想」、「グルジェフワーク」というような名称で一般に紹介された教えの体系から、グルジェフがもっとも伝えたかったと思われる本書が扱うような内容は抜け落ちていたり、表面的な扱いしかされていなかったりする。『ベルゼバブ』の編集を手伝ったとされるオラージュが本書をどのように理解していたかについては、C・S・ノット『古ジェフの教え』に収録された『ベルゼバブ』に関するオラージュの講義の記録が参考になる。

<sup>2</sup> 参考：[M・ミッチェル・ワールドロップ『複雑系—科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち』](#)（新潮社）

「個」が果たしうる意外にも決定的な役割。現代の複雑系科学が注目するこれらのトピックは、ベルゼバブが本書で提示する動的な世界観と重なるところが多い。

グルジェフにとって、およびその周辺において、これらは理論的な探究のテーマであるにとどまらない。それらは、グループでの共同の取り組み、およびグルジェフが教えた独自の舞踏・体操である「ムーヴメンツ」との関係で身をもってする実験的・追求での具体的な観察や課題と蜜に結び付いている。

グルジェフのアプローチにおいて、グループとは、一般に想像されるような上から下への教えの伝達の流れに属するものではなく、むしろそれを転じて下から上への上昇性の流れを触発すべきもの、そして生じた上昇性の流れのなかでのみ成立しうるものである。それをめぐる。

「どうして人はグループなんてものを必要とするのか？」(J・クリシュナムルティ)<sup>3</sup>

これはもちろん、本人がかつて関わった上から下への流れを強く志向する集合的な動きとの連想をもって「グループ」という言葉を解釈しているのであり、それとは逆の方向を帯びた流れのなかで人が結び付くことの可能性、グルジェフがその生涯をかけて追求した可能性に目を向けていない。

実際のところ、上から下への流れのなかでは、人はほんとうのところは互いに結び付けない。それは「一から多へ」の流れだからである。その流れのなかでは、人はほんとうのところは助け合えない。一部の者たちが助け合って利益を追求することで、他の者たちが不利益を受ける。熱力学第二法則ではこれを次のように言う。

「エントロピーの局所的な減少はその全体的な増大によって補償されなければな

---

<sup>3</sup> 「グルジェフグループ」に関する質問への答えとして、インターネット上で映像が公開されている質疑応答より。ただしこれは質問者が「グルジェフグループ」と称するものへのコメントであり、グルジェフの周辺に生じたグループワークに関する直接的な言明ではない。「グルジェフグループ」という言葉自体、「グルジェフワーク」という言葉とともに、グルジェフの身近では使われることのない、グルジェフにとって異質なものである。

らない」

グルジェフはこれを次のように言う。

「『一人は万人のために、万人は一人のために』という標語を知っているだろう。日常的な文脈でこの標語を使うなら、それはウソだ。それは実現不可能なのだから。だが、ブラザフッドにおいては、これは可能だ。。たとえ利己的な理由からでも、人はこれを求めなければならない」(『ミーティングの記録』より > [more](#))

「人間にとっての創造は集合的な現象としてしか起こりえない」([『グルジェフ講話録 第三編』](#)より)

人間にとっての創造とは、聖書的な意味合いでの創造、つまり上から下への流れのなかでの創造とは異なるもので、上から下への最初の流れがその方向を転じ、下から上への流れとなることで生じる。現代の科学においては、これを「創造」と区別して「創発」と呼ぶ。この創発は集合的現象としてしか起こりえない。

進化性の流れの追求は、人がひとりではできないものではない、あるいはするべきものではないことをグルジェフは強調し、仲間との探求やグループでの取り組みを重視した。グルジェフはもともと、本書を読み終えた後、そのような文脈での接触を求めた人だけに、これに続く著作に親しむことを許すことにしようと考えていた<sup>4</sup>。グルジェフが去ってから七十年近くを経て、グルジェフの周辺より生じた直接的な伝達の流れがほぼ途絶えたかのように見えるいまでも、グルジェフに関心を寄せる人たちが互いに知り合い、協働の取り組みをすることの必要性和必然性は変わらない。この創発的な文脈を理解し、それに加わろうとする人たちからの問い合わせ、関心の表明、創意・提案を歓迎する。

[郷 尚文\(訳者\)](#)

---

<sup>4</sup> 参考：[『来たるべき善きものの先触れ』](#)。